年　頭　所　感

巳年に老い路を生きながら…

認知症の人と家族の会岡山県支部代表　妻井　令三

巳年と喜寿

巳と言えば蛇だが、蝮に噛まれたことがある。“鬼畜米英”と教えていた先生が教科書を塗り潰せと命じ、“なぜ？”というしこりが残った小学３年生の終戦の夏の終わりの宵のこと。田舎のお講に父と出向き、その帰途家近くで足の親指に刺すような痛みが走った。父は「ハミにやられた！」と叫ぶと、剃刀でその傷口を少し切り裂き、母がそこを血と一緒に吸い取って吐き出してくれた。そして、川魚漁の漁網の強化剤に蓄えていて青柿の渋汁を井に注ぎ、嫌がる私の頬を殴りながら“死にたくないなら飲め!!”と飲まされた。腿とふくらはぎの２カ所を縛りあげ、うっ血を調整しながらの応急措置で、私は生き伸びることができた。今、自給自足の自然に即して生きていた父母の生活の知恵が喜寿まで生かしてくれたと感謝の念が沸く。

現代を生きる老い路の中で…

昨年の夏の暑さと陽射しの厳しさが気になっていた。８年ぶりに会った従妹が「小学校の夏、毎日の気温を記録する宿題があって、30度を超す日が２日だけあったことを覚えている」と言った。今は、35度を超す酷暑日が少なくない。たった半世紀余で、人類が進めて来た文明の余波が鮮明だ。

秋の冷気の到来に、私の体は温度の落差に対応不全となったのか、寝汗がもとで風邪気味となり咳が続いた。かかりつけ医に「念のためにレントゲンを撮ってみて」と所望したところ、「肺炎になっていますゾ！歳なので絶対安静を！」との宣言告知。リフレッシュ旅行、全国代表者会議参加を取りやめ等，皆さんに多大に迷惑をかけてしまうことになった。そして、思いもかけず、多くの方々から心配して下さるお言葉を頂いた。そうした言葉かけの有難さが改めてしみじみと身に沁みた。

15年の宝石箱

自宅での謹慎時間を埋める道連れに、会報（ぽーれぽーれ）を初めからめくり直してみた。県支部創設15年目を迎える流れの中に、その折々の出来事や仲間の顔や息遣いが蘇る。何よりも、介護に向き合う夫々の人々の真摯に生きようとする思いや優しさの豊かさに、改めてうたれたのである。

景山副代表が会報編集長の立場から、常々「これは大事な出来事ですし、貴重な介護家族の思いですから記事にして下さい」と言われる意味が、ズシンと腑に落ちる感慨。これはかけがえのない宝石箱だ…と感じ入った。

例えば、昨年１月号記載の「影のように」（田尻文子副代表）の詩は、

“どんなにやさしく声をかけてもその人には伝わらないかもしれない”だが“あなたの想いが真実のものなら、その人の心に必ずとどいている”と。病床で再会した詩文は、私の中でこだましている。

長寿社会に向き合って、どう生きる…

昨年、岡山県の100歳以上になった方が1.115人という。40年前８人であったことからすると、ナント139倍の伸びなのである。“花の命は短くて　苦しきことのみ多かりき”と詠った林芙美子は48才で逝ったが、彼女の作品「放浪記」を森光子は92歳まで生きて主役を演じ続けてきた。まさにシンボリックな半世紀の流れといえよう。

人（ヒト）という種が、長寿という栄光のライフステージを獲得した裏で、認知症を抱えて生きるあり方を模索する時代に入っている。

信濃毎日新聞社（長野）は、2010年「笑顔のままで認知症―著寿社会」をシリーズ特集し、その年の新聞協会賞・ＪＣＪ（ジャーナリスト協会）賞など数々を受賞した。「実名報道に徹する」原則に立っての報道は、当事者や家族の勇気を得て成し遂げられ“偏見の壁”を打破する成果を上げた。

それに続き、今年から朝日新聞社が年間企画「認知症と私たち」を元旦のプロローグを皮切りにスタートさせた。県支部会員の戸田恵さんがそのシリーズ第１回目として１月３日紹介されたが、その見出しは「元の私は残っている」。戸田さんの取材に応じられた勇気に厚く敬意を表したい。

そして、同社が、まず認知症当事者の想いや実情を取り上げてスタートしたことを評価したい。

時あたかも昨年、ＷＨＯ（世界保健機関）は、「世界は老いはじめた」として、“認知症を国家の公衆衛生の優先課題に”と各国に提起した。認知症が、人類史上の主要課題になってきている査証といえよう。

更に別の視点から、原発事故以降の混迷の折柄、私たちは長い歴史の中に生きる、人（ヒト）という種の保全が問われる新しい幕開けの時代の巳年に、今立っているとも言わねばならない。